





STAMP



本学での男女共同参画の推進やワーク・ライフ・バランスについて、学部長にインタビューを行いました 

- Q 1 ご自身のワーク・ライフ・バランスについてどう思われますか？
- Q 2 貴学部ではどのような男女共同参画の取組が必要だと思われませんか？
- Q 3 女性研究者へのメッセージをいただけますか？ 

## 吉尾 寛 人文学部長



- A1 私の妻も研究者です。母の支援はありましたが、育児休業を取得できなかったため、子育てには苦労しました。現在、若い人たちが育児休業を取得することができるのは良いことだろうと思います。
- A2 職場の環境整備は大事だと思います。人文学部の親睦会には家族やお子さんが一緒に参加しています。夕方学童保育所から迎えたお子さんを連れて会議に出ることも可能にしています。中国の研究所に出張していた頃、職員が毎日夕方子どもを連れて来て、職場に優しさを感じられたことを思い出します。今は私も親の介護や定期健診のため職場を離れる時間が必要ですし、介護のための取組も必要だと思います。大学は男女共同参画が進んでいる組織ですので、学外の地域社会にも取組が広まって行って欲しいと思います。

A3 夫婦によって育児・家事の分担をはっきり決めている場合と、その時の状況に応じて互いに協力している場合等があると思います。また仕事と研究の両立についていろいろなケースに即してご相談にのりますので、遠慮なくいらしてください。



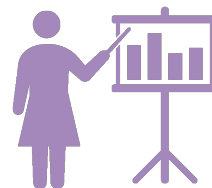
## 藤田 詠司 教育学部長

A1 私の妻も非常勤で働いていますので、家事は分担しています。今日は私が夕食当番ですので、家に帰ったらハンバーグを作ります。また仕事を遅くまでしないようにしており、ワーク・ライフ・バランスについて意識的に改善するようにしています。

A2 教授会については、簡潔に済ませて早く終わらせるようにという共通了解を皆で持つようにしています。会議の際に子育て中の教員が事情のある場合には、配慮するようにしています。教育学部は女性教員が多く、教授にも女性がいますので、男女共同参画について相談できる関係がある程度できていると思います。育児だけではなく、介護についても相談したり、話し合うことのできる職場環境だと思います。

女性教員の採用に関しては、優秀な女性が増えていきますので、特に性別に配慮をしていなくても女性教員が増えていきます。公募への女性研究者の応募については歓迎したいと思います。FDなどをとおして、男女共同参画に対する意識をさらに高めていきたいです。

A3 女性研究者の方は、相談したいことがありましたら、私のところまでいらしてください。必ずお力になります。



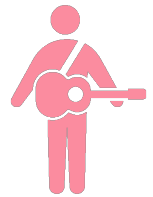
- Q1 ご自身のワーク・ライフ・バランスについてどう思われますか？
- Q2 貴学部ではどのような男女共同参画の取組が必要だと思われますか？
- Q3 女性研究者へのメッセージをいただけますか？



(写真中央)

## 鈴木 知彦 理学部長

A1 私は趣味で音楽を楽しむことによって、ストレスを解消しています。高知に赴任して33年になりますが、この14年間、バンドでギターを担当しています。アマチュアバンドが長年続くことは珍しいですし、バンドの練習やメンバーとの交流はとても楽しいです。月に2回、練習のための時間を作るように私は心がけています。



A2 理学部は女性教員が5人と少ないですが、どのような場面でも男女を公平に扱っています。理学部の女子学生比率は3割弱ですので、学生のためには女性教員が増えた方がよいと思います。その他としては、私も親の介護について今後の課題を抱えていますし、大学でも仕事を続けながら介護と向き合うための取組が必要だと考えています。



A3 女性研究者には、男性には分からない苦労やプレッシャーもあることでしょうか。辛い部分もあると思いますが、頑張っていて欲しいと思います。しかし理系の女性研究者はパワーがあり、潰されそうになっても乗り越えてきた方が多いので大丈夫だと思っています。私は、女性研究者を応援しています。

## 杉浦 哲朗 医学部長

A1 子どもの教育や親の介護といった事情から単身で高知に赴任して、16年目になります。高知は車社会なので、健康のために休みの日には歩いたり、ゴルフをしたりと運動を心がけています。



A2 医学部では院内保育所こはすキッズや、「女性医師キャリア形成支援プログラム」での短時間勤務制度によって女性支援を行っています。医学部1年生に対しては、「医療現場における男女共同参画」を開講しています。大学では、私自身親の介護を抱えていますので、介護に対する支援の取組が今後必要だと思います。

A3 女性にとって「働きやすい職場環境」と「ご主人の理解」、この二つをしかりと整えることが必要だと思います。職場では、女性が仕事以外に主婦業・母親業を果たしていることについて上司や同僚と意見交換を行い、理解を得ることが大切です。一方、家庭では、例えば病院において患者さんの急変などで勤務時間が延びた場合に、ご主人の理解があるかどうかで女性医師のメンタル面でのプレッシャーが変わってくると思います。医学部では女性を歓迎しており、女性が上司や同僚と意見交換しやすい環境を整える努力をしています。

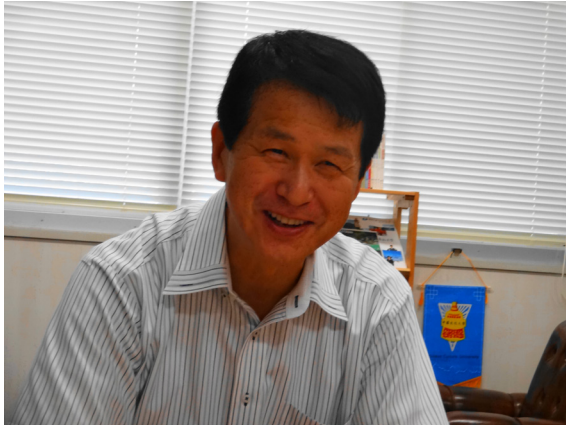




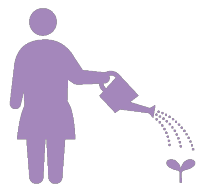
## 石川 勝美 農学部長

A1 家庭が良い状態であることが、良い社会を作る基本だと思います。植物は見えない所にある根が地上部を支えているように、社会の根幹部を支えているのが家族であり、人生に関わる大事な部分だと思います。

A2 男女共同参画の持つ意義は、ワーク・ライフ・バランスと同様です。男性、女性を含めて全体バランスで捉える必要があります。男女がそれぞれ個性と能力を十分に発揮できる環境づくりが大切です。農学部は女子学部生も多いので、大学院生や研究者になる女性が更に増えて欲しいと思います。女性の視点というのは、「見えない価値」への取組でもあります。女性独自の視点や、きめ細かさは実験の準備やデータ整理に重要です。女性の視点が入ってくることによって、多角的な観点から、研究・教育・大学運営を進めることができます。女性と男性でお互いに足りないものを助け合い、協力することによって、1+1が2以上にもなります。言葉かけでも元気になったり、活性化し、周りの雰囲気は大きく変わります。人と周りとの関わりや調和が大事です。



A3 女性研究者にはワーク・ライフ・バランスを大切に、元気と高い志をもって頑張ってもらいたいです。私はそのために応援します。女性研究者のためには、予算をカバーする意気込みが必要です。これからの社会において強く求められているのは、女性的視点の発想です。教員公募には女性が積極的に応募して欲しいです。



### ロールモデル講演会「10年後の自分を想像する～研究も結婚も出産もしたら、こんな生活だった」

男女共同参画推進室では、平成26年4月23日に研究者を目指す学生のキャリア支援を目的としてロールモデル講演会を開催しました。

講師の藤川和美さんは日本女子大学を卒業後、憧れだった青年海外協力隊に参加し、ネパールのゴダワリ植物園で2年半にわたり植物学に係る活動に従事しました。そして、休暇中のヒマラヤ登山で出会った「ワタゲトウヒレン」という高山植物に魅せられて、「これはいったい何?」「知りたい」という好奇心から大学院進学を決意。日本でヒマラヤの植物を研究できる大学院を調べ、苦手だった英語を克服するために、得意科目の生物学を英語で学ぶという方法を選択し、志望校に合格。青年海外協力隊の時の積立金を学費に充てて、東京大学大学院に進学しました。



そして、修士課程の時にパートナーと結婚、博士課程の2年生の時には出産を経験。そこで、結婚によって良き相談相手を得たと同時に、育児と研究を両立させるためのモチベーション維持と、着実に研究を進捗させるために、研究の目的を明確化することの大切さを実感したそうです。そのときの経験から、研究もひとつの「プロジェクト」と考え、研究結果を成し遂げるためには「マネジメント力」を磨くことが重要と考えました。

現在、藤川さんは高知県立牧野植物園で研究員として基幹研究80%と個人研究20%の割合で研究をしています。また、JICA（国際協力機構）の草の根技術協力プロジェクトでミャンマーの植物多様性の調査を実施中で、定期的にミャンマーと日本を行き来する、多忙でも充実した日々が続いているようです。

最後に、藤川さんは、これまでの経験から、①アンテナを高く感性を磨く②段取り力を付ける③味方を増やす④ベストを尽くす⑤最後までやれば失敗ではない⑥技術習得・修練を怠らないと、研究員としての6つの心得を紹介されました。

そして、高校生までの勉強と大学生からの研究は異なる。何でもすぐに先生に聞くよりも、自分で調べて、調べて、調べて、それでもわからなかったとき、自分はこの方法で調べたが、わからなかった。他にどのような方法がありますか?と聞く。そういう姿勢で学ぶことで、身に付く知識や技術が多くなる。そして、10年後の自分、なりたい自分の姿、成功のイメージを妄想ではなく具体的に思い描くことが大切、と未来の研究者たちにエールを送りました。



講演の様子は平成26年4月23日のNHK高知「こうち情報いちばん」で放送されました。

## 第4回ワーク・ライフ・バランス講座「楽しむパパで子どもが育つ～父親の子育ては社会を変える～」

男女共同参画推進室では、平成26年6月4日に第4回ワーク・ライフ・バランス講座「楽しむパパで子どもが育つ～父親の子育ては社会を変える～」を開催しました。

冒頭、男女共同参画推進室の廣瀬淳一室長より、「大学で実践し、教育に活かし、社会に広げる」ことを目的としている高知大学の男女共同参画の基本理念・方針とワーク・ライフ・バランス講座の趣旨説明がありました。

講演会では、株式会社こうち暮らしの楽校の代表取締役社長で、父親の子育てサークル「こうちパパ楽会」代表の松田高政さんに、「楽しむパパで子どもが育つ～父親の子育ては社会を変える～」というテーマで講演して頂きました。

松田さんは、妻が育児休業を取得したことで、自分は仕事に専念できると考えてしまったことが、妻の育児負担や悩みを大きくしてしまったと反省したそうです。それから、父親がもっと積極的に出来ることをしようと、こうち男女共同参画センター ソーレの支援を受けながら友人と一緒に活動を始めたことが「こうちパパ楽会」が生まれたきっかけでした。

講演では、松田さんがこれまでに行ったイベントが紹介されました。子どもが喜ぶパン作り、竹のおもちゃ作りなど多岐にわたる活動が行われました。イベントで大切にされたことは、「こうちパパ楽会」の名前のとおり、父親が楽しんで、そして学べること。松田さんは、父親が楽しめることが、活動を継続するためには大切だと言います。

現在は、「こうちパパ楽会」のメンバーも増えました。メンバーには様々な技能を持つ、様々な職業の父親がいるので、メンバーが講師を務めてのセミナー、バーベキューやアウトドア遊びを無理のないペースで続けているそうです。

こうしたイベントに参加した父親からは、「子どもとこんなに長い間遊んだのははじめて」、「男性同士だと、気兼ねすることなく親子で楽しめた」、「お母さんにも評判がいい」などの声が寄せられたという事です。

松田さんは、男女共同参画の視点は、家庭、職場、地域においてとても大切。食事や人生もバランスが必要で、バランスが偏ると人も職場も社会も病気になってしまうかもしれない。男女共同参画はすべての老若男女、地域をじわじわ元気にする漢方薬のようなもの。まずは男性から変わる、即実践するという気持ちで、私もOK、あなたもOKを心掛けて、高知を暮らしやすく、活力あふれる地域にしていましょ、と会場の参加者に呼びかけました。

同講座は、こうち男女共同参画センター「ソーレ」のソーレサポーター講師派遣制度の協力を得て実施致しました。



## 第5回ワーク・ライフ・バランス講座「負担をためすぎない介護」

平成26年7月16日に、第5回ワーク・ライフ・バランス講座「負担をためすぎない介護」を開催しました。

小島優子男女共同参画推進室特任助教が、「介護の経済的負担及び高知大学の介護制度」について講演しました。介護にかかる期間から介護費用を算出すると、5,299,000円になり、介護には経済的に負担がかかることから、どうにかして仕事との両立を図ることが必要であることを指摘しました。

医学系連携医学部門の大浦麻絵助教より、「介護者が負担をためすぎないような介護運営について」の講演がありました。高知県は、老年人口割合が全国2位であるのに対して、生産人口割合は全国46位であることから、介護をめぐる状況はたいへんシビアです。在宅

介護成功の秘訣は、在宅介護を支える介護者の負担軽減をすることであることが紹介されました。

外国の事例から学べることは、介護者を守るためには、介護者自身の休息ケア、および介護者の生活の質への視点が必要なこと。それは、介護者だけでなく、被介護者を守ることに繋がっていきます。負担をためすぎない介護を行うためには、介護を行う人が誰であるか、そしてどのような介護を運営するかといった状況に応じて、介護サービスを選択することが重要です。その介護サービスを有効に利用するためには、生活が変われば絶えず見直すことが大切であることが提示されました。





## 「教員と教員を目指す人のためのデートDV研修講座」

男女共同参画推進室では、平成26年6月18日に「教員と教員を目指す人のためのデートDV研修講座」を開催し、62人の参加者がありました。この講座は、こうち男女共同参画センター ソーレが、平成24年に開発したデートDV啓発研修資料を多くの人に活用してもらうために開催しているものです。講師の山中千枝子氏は、公立中学校、(財)高知県人権啓発センターを経て、現在は千斗枝グローバル研究所代表として、研修、講演、啓発活動を担当されています。

まず、恋人に「私以外の人と話をせんとって」と言われたらどうするかについて、賛成と反対に分かれて、ディベートを行いました。賛成意見としては、「本やエッセイを読んで学ぶこともある」などがありました。それに対して反対意見としては、「束縛することによって対等な恋愛をすることはできない」、「恋人の自由を奪うのはおかしい」などがあり、白熱した議論が展開されました。次にディベートで議論した「私以外の人と話をせんとって」は、デートDVかどうかについてグループに分かれてディスカッションし、デートDVだと思うことを模造紙に書きこみました。例えば、連絡を強要すること、「LINE すぐ返してね」「今から来て」「すぐ来て」と言うことなどがデートDVではないかという意見が出ました。

最後に山中先生からデートDVについて話がありました。日本社会には家父長制が残っており、人間関係の中に支配一服従関係があると、DVが発生します。しかし、自分の言いなりになるように人を支配するのは、男女共同参画の関係ではありません。カヤ支配一服従ではない、愛による関係を築く必要があります。そのためには「俺の言うとおりのいや」「私の言うとおりのして」という関係をやめる必要があります。自分が愛されていないと愛することはできません。皆が幸せにならなければ、対等な男女共同参画は成り立ちません。民主的な世の中を作っていきたいということが、山中先生が参加者に伝えたいことでした。



## 企画展示「私以外の人と話をせんとって」はデートDV? ~「デートDV研修講座」のグループワークから~



平成26年7月1日から7月18日まで、デートDV研修講座のグループワークで参加者が作成した成果の展示を行いました。同時に、デートDVを受けてしまったり、暴力をふるってしまった、友達からデートDV相談をされたときにどうすればよいかについて学べるデートDV啓発パネル「それってラブラブ……?」(公益財団法人 こうち男女共同参画社会づくり財団作成)も展示しました。デートDV研修講座の参加者が講座を振り返り、展示を見る人がデートDVについて考えるきっかけを作りました。



## パネル展「女性と働き方」

平成26年6月2日から6月30日まで、こうち男女共同参画センター ソーレの協力により、パネル展「女性と働き方」を開催しました。多数の学生や教職員がパネルを通して、女性がおかれている状況や、ワーク・ライフ・バランスについて学びました。



## キャリア継続についての講演会～キャリアの継続について考えよう



平成 26 年 6 月 25 日に、「キャリア継続についての講演会」を開催しました。この講演会は、ワーク・ライフ・バランスを実践して研究と家庭を両立させるためには何が必要かを考えて、学内の環境整備に役立たせるために開催しました。講師は、高知大学人文学部の岩佐和幸教授と、高知大学教育学部の森田美佐准教授が務めました。

まず人文学部の岩佐和幸教授は、キャリア継続については、以下の三点を心がけているそうです。一つには、「ぼちぼち精神」が大事です。低空飛行でもドロップアウトしないように、続けることが一番大事です。二つには、時間はとても貴重です。岩佐教授は、お子さんの出産時に高知大学で育児休業を取得して、その後復帰しました。家事と育児には休みがないので、とにかく時間がありません。なので、段取りと計画性が不可欠です。三つには、視点の転換です。育児と日常生活には、「仕事人間」には見えないような仕事を豊かにする事柄があります。特に、社会科学は日常の出来事が研究対象となるので、社会の接点となる個人的経験が欠かせません。

次に、教育学部の森田美佐准教授から、講演がありました。キャリア継続に必要なことは、以下の点です。自分の境遇を嘆かなくてよいので、逃げ出さないことです。むしろそこから何を学ぶかが大事です。そしてつらいときは休みましょう。さらに自分の居場所となる「アンカー」、言い換えると船のおもりをどこに落とすかを決めることが大事です。自分の好きなこと、楽しいことであれば、つらくても続けていくことができます。そして、子どもは、あなたが思うよりあなたの仕事を誇りに思っているのです。よくやっている自分をほめましょう。子どもが育てていることは喜びになりますというお話がありました。参加者からは夫婦間での協力体制や家事等について質問があり、たいへん得るところの大きい講演会となりました。



## 理事と楽しく語らう会 RIJI TALK



平成 26 年 7 月 17 日に、理事と楽しく語らう会 RIJI TALK を開催しました。この会は、学生や教職員が普段考えていることや、大学に対する希望などを直接櫻井克年理事（総務・国際担当）と語ってもらった目的で開催しました。

まず、櫻井理事から挨拶がありました。櫻井理事は、大学に女性研究者が半分以上いるタイなど東南アジアに渡航した経験から、大学で男女共同参画を推進することは当たり前のように感じているそうです。櫻井理事が女性の多い合唱部に所属していた学生時代の話や、趣味のギターの話でもりあがりしました。

男女共同参画推進室の研究支援員制度を利用している研究者からは、制度を利用することによって科研費を取得することもでき、研究者と研究支援員の双方にとって良い制度があるということが話題に出されました。また実際に研究支援員として勤務している参加者からは、文献資料の探し方や、申請書類の書き方など研究者の支援を通じて勉強になっているということ、理事に話されました。食後には、廣瀬淳一男女共同参画推進室長による手作りのチーズケーキがふるまわれ、皆で美味しくいただきました。



Mr.Hirose's handmade cheesecake





## メンタリング講習会「共創・共進のメンタリングプログラム～メンター効果とメンバー効果の向上を目指して～」

男女共同参画推進室では、平成26年7月17日にメンタリング講習会「共創・共進のメンタリングプログラム～メンター効果とメンバー効果の向上を目指して～」開催いたしました。講習会には45名の参加者がありました。

冒頭、高知大学の櫻井克年理事より、メンタリング講習会についての趣旨説明がありました。大学でメンターの役割が注目されているが、どのようなプログラムが高知大学にとって適しているのか、先進事例から学ぶ機会としたい旨、お話がありました。

事例報告1では、高知大学総合教育センターの俣野秀典講師から、「メンタリングの活用事例の紹介～授業コンサルの実践から～」と題する報告がありました。

一般的に大学教員は「教授法」について学ぶ機会は少なく、試行錯誤のなかで授業のスタイルを身に付けていくことが多い。総合研究センターの授業コンサルテーションを通じて、客観的な意見をもらえることは、とても貴重な機会であるし、広い意味でメンタリングの要素が含まれているというお話でした。

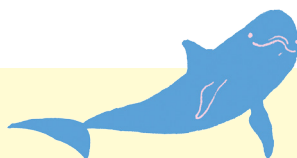
事例報告2では、高知大学医学部の安光ラヴェル香保子特任研究員から、「キャリア形成に必要なサポート～私の経験から～」と題する報告がありました。安光特任研究員はメンターとメンティの両方の視点から、ご自身の経験に基づいた内容の報告がありました。イケボス（メンター）の存在がチーム全体の力の向上につながっており、メンター効果がメンバー効果につながっている好事例でした。

先進事例の紹介として、名古屋大学高等教育センターの中井俊樹准教授から、「メンタープログラムの成果と課題～名古屋大学の取組から～」について講演がありました。

メンタリングにはメンティへの効果だけでなく、メンティをサポートすることによるメンターへの効果がある、との説明がありました。また、大学によるメンタリングについては、「非公式なメンタリング」と「公式的なメンタリング」があり、どちらにも長短がある。大学によって文化や環境が異なることから、どのようなプログラムを導入するかは機関によってよく検討する必要があるとのアドバイスがありました。



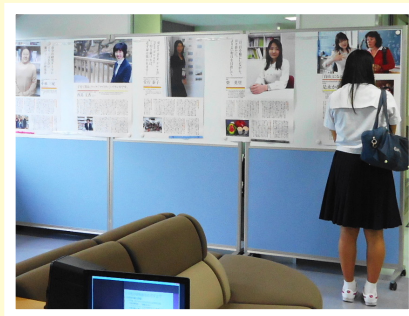
## オープンキャンパス



### きらめく☆未来コーナー

平成26年8月2日・3日のオープンキャンパスでは、男女共同参画推進室は「きらめく☆未来コーナー」を開設しました。このコーナーでは、高知大学女性研究者ロールモデル集「Vita-min vol.1」（高知大学男女共同参画支援ステーション、平成25年発行）に掲載したロールモデルの紹介を、パネルにして展示しました。高知大学を志望する女子生徒は、興味深そうにパネルを見ていました。

その他に男女共同参画推進室の取組や、高知大学学生の男女比などをポスター展示し、受験生に説明しました。キャリア相談コーナーを設けて、受験生の入学後の相談にものりました。さらに、過去に開催したロールモデル講演会や、共通教育科目「男女共同参画社会を考える」講義の上映も行いました。



### オープンキャンパス託児の実施

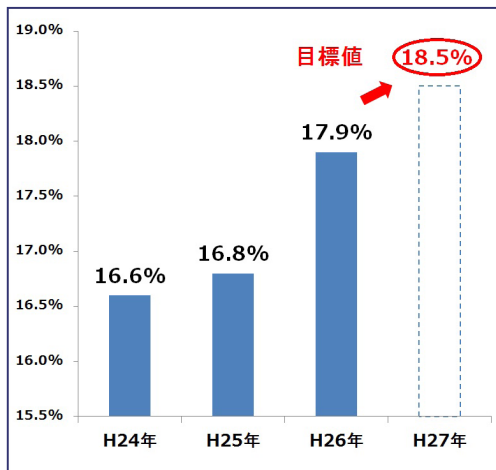
高知大学では、平成26年度からオープンキャンパスを担当している教職員を対象として、学内に託児室を開設しました。今年度は、8月2日に教員1人のお子さん2人が利用しました。託児室は朝倉キャンパスのおうちクラブに設置しました。

## 高知大学女性研究者比率

米国の女性研究者比率の平均は34.3%（平成24年度）でした。一般的に米国の大学ではマイノリティに対する配慮から積極的改善措置（アファーマティブ・アクション 注）が講じられています。

日本の場合、平成24年度における全国の研究機関（企業、非営利団体、公的機関、大学等）の女性研究者比率の平均は14.4%でした。平成15年度にはこの比率が11.2%であったことを考えると、徐々にではありますが女性研究者が増えていることがわかります。しかし、特に自然科学の分野では女性研究者の比率が低いことが指摘されており、なかでも工学の分野における女性研究者比率は5%（大学等では9.2%）と最も低くなっています。

高知大学の女性研究者比率は平成24年度の16.6%から平成26年度の17.9%に増加しました。高知大学が平成24年度に採択された文部科学省科学技術人材育成費補助事業「女性研究者研究活動支援事業」では、平成27年度に18.5%に達することを目標としています。女性が働きやすい、働きたいと思う職場をデザインしていくことが、男性にも働きやすい職場環境の整備につながると考えられます。そのために男女共同参画推進室では、仕事と生活の両立支援、職場の環境改善、意識改革を推進しています。



注 日本では類似の概念でポジティブ・アクションを使用することがあります。ポジティブ・アクションについては、例えば、「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約（女子差別撤廃条約）」の第4条1項は、「男女の事実上の平等を促進する暫定的な特別措置をとることは、この条約に定義する差別と解してはならない。ただし、その結果としていかなる意味においても不平等な又は個別の基準を維持し続けることになってはならず、これらの措置は、機会及び待遇の平等が達成されたときに廃止されなければならない」としています。また、日本の「男女共同参画社会基本法」（平成11年法律第78号）は、第八条で、国は「男女共同参画社会の形成の促進に関する施策（積極的改善措置を含む）を総合的に策定し、及び実施する責務を有する」としています。

## お知らせ

### 両立コンシェルジュデスクのお知らせ

両立コンシェルジュデスクは、高知大学の育児・介護等と仕事の両立相談窓口です。仕事との両立のために悩んでいることや困っていることがあるとき、育児情報や介護情報が欲しいときにご相談ください。岡豊キャンパスや物部キャンパスへの出張相談にも対応します。

■ 相談専用メールアドレス ⇒ [conciierge@kochi-u.ac.jp](mailto:conciierge@kochi-u.ac.jp)

こんなときに  
ご相談ください

- ・大学近辺の保育所やベビーシッター情報がほしい。
- ・親の介護と仕事の両立について困っています。
- ・育児休業を取得したいけれど、職場の理解が得られるだろうか。
- ・学会等でイベント託児を実施したい。



### 研究職キャリア相談コーナーのお知らせ

男女共同参画推進室では、研究職を目指す学生のキャリア相談を受けつけております。

こんなときに  
ご相談ください

- ・アカデミック・ポストを目指すには？
- ・研究室の環境について
- ・研究職に進もうか悩んでいる

### 力仕事サポーター利用者の募集

- \* 募集対象 \* 高知大学に勤務する大学教員・研究員の女性で、ライフイベント中の者。
- \* 内容 \* 個人の研究のために、実験等で使用する重い機械等の運搬・操作の補助、書籍運搬等が必要な際に、短時間の「力仕事サポーター」が随時支援を行います。

### 第6回中国四国男女共同参画シンポジウムのお知らせ

日時：平成26年11月28日（金） 13:00～17:05  
 場所：高知大学朝倉キャンパス メディアの森6Fメディアホール  
 テーマ：ギアチェンジ！共に働く時代の男女共同参画社会  
 ～「男働き」社会の見直しと女性のキャリア形成のこれから～

高知大学 男女共同参画推進室 しあわせ ぶんたん

平成26年9月 発行

〒780-8520 高知市曙町二丁目5番1号 国立大学法人 高知大学 総合研究棟3階

【☎】088-888-8022【☎】088-888-8023【✉】[sankaku@kochi-u.ac.jp](mailto:sankaku@kochi-u.ac.jp)【🌐】<http://www.kochi-u.ac.jp/sankaku/>

